for my precious
収穫祭に花束を
添えて
Hyunckel & Maam

収穫祭に花束を添えて

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23135217

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後, ダイ, レオナ, ダイレオ

原作から６年後。
ヒュンケル（27）、マァム（22）、レオナ（20）、ダイ（18）
ヒュンケルとマァムは結婚してネイル村で生活しており、長男が生まれています。ダイは帰還後。レオナはパプニカ女王即位済み。

レオナがお忍びでパプニカ王国内のとある街の収穫祭に訪れるが、その際の護衛をヒュンケルとマァムに依頼した。同行を決めたふたりは。

「あるべき未来に進むために」の「余話　花束」novel/15667396を前提としていますが、未読でも問題ありません。

2024.10.4　ヒュンマフェス「闘志と天使の後夜祭」合わせ

Table of Contents

収穫祭に花束を添えて

　女王レオナがお忍びで収穫祭に行くので、護衛として付き添ってもらいたいという依頼がパプニカ王家からマァムに届いたのは、夏の終わりの頃だった。
　女王たっての希望であるとのことであり、マァムは、１も２もなく承諾した。
　そうすると、追って、パプニカ王家から収穫祭の詳細が送られてきた。
　気になったのは、収穫祭が行われるのがパプニカ南部の街だということだった。
　マァムは、自宅のリビングでパプニカ王家からの書状を読みながら、最後の一文に視線を落としていた。
―差し支えございませんでしたら、御夫君とともに、女王の護衛をお願いしたく存じます。

　マァムは、その一文を目に写しながら、彼女らしくなく、眉根を寄せた。
　マァムがヒュンケルとともに暮らすようになって、もう２年。昨年生まれた二人の間の長男は、早くも歩き始め、いよいよ目が離せなくなった。
　そんな中でもレオナの護衛を引き受けたのは、マァム自身が久しぶりにレオナに会いたかったことと、ヒュンケルが長男の面倒を見てくれると約束していたからだった。マァムとしても、ヒュンケルと因縁の深いパプニカに、彼をあまり連れては行きたくなかったが、さりとて、その理由も明言できず、息子の存在は、ちょうどいい理由だったのだ。
　マァムは、しばし思案に暮れていたが、やはり断ろうと思いなおしたとき、自宅の玄関が開いた。
　ふと見ると、ヒュンケルが息子を抱き上げたまま外から帰ってきたところだった。
　マァムは慌ててパプニカ王家からの書状を伏せてテーブルに置い

た。
「お帰りなさい、ヒュンケル。」
「ただいま。」
　すると、母親を見つけた赤子は、父の腕の中で手足をばたつかせて声を上げた。
「うー！まンま。」
　母を呼びたいのだろうが、アクセントもおかしいし、まだ上手く言葉になっていなかった。幼い息子のその様に、マァムもヒュンケルも顔をほころばせた。
「あなたも、お帰りなさい。おいで。」
　マァムが腕を伸ばすと、彼女の息子は小さな両手を目いっぱい広げて母に向けた。
　息子をマァムに預けたヒュンケルは、ちらりとテーブル上の書状に視線を落とした。その目の動きに気付いたマァムは、ヒュンケルに釈明した。
「あ、気にしないで、ヒュンケル。レオナも無理を言っているわけじゃないと思うから。この子の面倒もあるし。断るわ。」
　パプニカ王家からの書状が来たことは、ヒュンケルも把握していた。もちろん、その内容も承知の上だ。
　ヒュンケルは、軽い手の動きで書状をひっくり返すと、改めてその文字を目で追った。
「俺にも来てくれということなのだろう？女王がわざわざこう言ってきたんだ。無下に断ることもできまい。」
「えっ・・・でも・・・。」
「俺たちがいない間、この子の面倒は、レイラさんが見てくれるそうだ。ちょうどさっき寄ってきた時にその話になった。たまには夫婦でゆっくりして来いと言われたよ。」
「母さん・・・もう。」
　マァムは、母の配慮の頬を赤らめた。恥ずかしいが、ありがたい。
「それに、俺もこの街は気になってな。」
「そうなの？」
「心配するな、マァム。女王もお忍びなんだろう？なるべく顔も隠

すし、偽名も名乗るさ。そうすれば、俺が何者かもわからないだろう。」
「・・・なんか、気を遣わせちゃってごめんなさい。」
「いや、気を遣ってくれているのはマァムだろう？俺を心配してくれているんだな。ありがとう。」
　マァムは、息子を抱きしめたまま黙って首を横に振った。彼女がヒュンケルを心配するのも彼に配慮するのも当然のことだ。
　ヒュンケルは、ふっと笑みを浮かべると、妻の方に腕を回し、息子ごと抱きしめた。
「わざわざ女王が俺たちふたりに声を掛けてくれたんだ。楽しんでこようか。」
「うん。」
　マァムは、頬を染めて頷いた。

　マァムは初めて訪れた街の賑わいに感嘆の声を上げた。
　普段は、ちいさな街なのだろう。周囲の荒れ地から区別されて整えられた町並みは、少し離れれば一望できるほどであった。連なる屋根の向こうに、葡萄棚がいくつも見えた。
　だが、この日は、街の入り口のゲートにも飾り付けがなされ、商人や旅人の出入りも多い。街の降り口や付近の街道に、自警団の男性が見えるが、おそらくはそれは地元民を装ったパプニカ騎士団の兵士だろう。
　賑わいを見せる街の様子に、マァムは傍らのレオナに嬉しそうに話しかけた。
「にぎやかね！とても楽しそうだわ！」
「そうでしょう？」
「レオナは来たことあったの？」
「あっ、マァム。」
　レオナに付き添っていたダイにたしなめられ、マァムは慌てて口元を押さえた。レオナはお忍びなのだ。ここで身分が明かされるようなことがあってはならなかった。
「レーナお嬢様、だったわね。」
「そうそう、マイアお姉さま。」

互いに偽名を名乗り合い、顔を見合わせると、レオナとマァムは揃って噴出した。
「慣れないわね。」
「しょうがないわ、今日だけだもの。」
　そう言って、レオナは肩をすくめた。
　レオナは先ほどのマァムの質問に答えた。
「あたしもここは初めてかな。ワインはパプニカの特産品のひとつだから、収穫祭は、あっちこっちの街でやってるけれど、この街は来たことなかったのよ。」
「そうなの。だったら、視察できてもよかったんじゃないの？」
「そうなんだけどね・・・実はね、この街の収穫祭はちょっと独特でね・・・。」
　そう言うと、レオナはにやりと意味ありげな笑みを浮かべた。その場にいたレオナを除く３人は途端に嫌な予感に襲われた。
　マァムとともにレオナに付き添っていたヒュンケルは、ダイに指示をした。
「街の周辺は騎士たちが警備に当たっているが、何があるか分からん。お前は常にこの方に同行してくれ。俺たちは、いったん街の中を散策しながら警備に当たる。」
「うん、わかった。」
「今日は・・・ディーノ、でいいのか？」
「うん。なんだかくすぐったいけどね。」
　そう言って、ダイは、笑みを浮かべた。
　もうダイも１８歳になる。
　いつの間にか、ヒュンケルが見上げるくらいの背丈になり、肩幅もしっかりとした立派な成人男性だ。だが、こうしてかつての仲間たちで話をしていると、あの頃の１２歳の彼が顔をのぞかせるようであった。
　レオナはにこやかに笑みを浮かべた。
「じゃあ、ディーノくん、行きましょうか。ふたりっきりで行動なんて久しぶりね！」
　レオナはそう言って、ダイに腕をからませた。ダイも照れてはいるが、笑顔だ。

レオナは、マァムとヒュンケルに軽く手を振った。
「じゃあ、マイアお姉さまをお願いね、ヒースクリフ。」
「・・・その名は止めてもらえませんか。」
　げんなりとしたヒュンケルに、ダイは不思議そうにレオナに尋ねた。
「？なんで嫌がってるの？かっこいい名前じゃない。」
　すると、こともなげにレオナは答えた。
「最近あたしが読んだ恋愛小説の主人公なのよ。頭文字が同じだからそれでいいかと思ったんだけど、実はその主人公って、相当なこじらせ男子なのよね。」
　ダイは、レオナの発言をきょとんとした顔で聞いていたが、最後の言葉で噴き出した。
「・・・ははっ、それじゃあ嫌がるはずだよ。」
「うーん、まさか彼もあの内容を知っているとは思わなかったのよね～。さすが、博識だわ。」
「名乗らなきゃいいんだから大丈夫だよ。」
「そうね、あたしたちはあたしたちで楽しみましょう！
　もう、最近は、縁談がどうこうでうっとおしかたのよ！あたしには君がいるのにね！」
　レオナはそう言って、ダイを見上げ笑みを浮かべた。

　マァムとヒュンケルは、ひととおり街中を散策していた。
　もちろん、ただの散策ではない。二人とも戦士の眼差しで、街のあちこちに気を配り、不審な人物がいないか、抜け目なくチェックをしていた。ふたりとも、フード付きのマントをかぶっているが、この街に立ち寄る旅人は、皆、似たような出で立ちをしているので、顔を露わにしていなくても、特に不審がられることはなかった。
　パプニカ王国から派遣された旅人、見物人に扮した兵士とすれ違うと、マァムもヒュンケルも互いに会釈や目配せを交わし合い、異常がないかを確認しあっていた。
　ぐるりと街をまわり、特に異常がないことを確認すると、マァムはほっと息を吐いた。

「大丈夫そうね。」
「いまのところはな。」
　ヒュンケルは警戒心を解いていない顔で、マァムに応えた。戦士として生きていた期間が誰よりも長い彼は、隙をついた奇襲の恐ろしさをよく知っていた。
　マァムは、ヒュンケルの返答に頷き、応えた。
「そうね。気を付けないとね。
　でも、このまま何事もなく終わってくれればいいわね。」
「そうだな。」
　そう語るヒュンケルの眼差しは、立ち並ぶ祭りの露店に注がれていた。
　収穫祭を迎えたこの街の広場には、様々な露店が軒を並べていた。
　目玉は何といっても、樽を開けたばかりのワインの新酒。ヌーヴォーと呼ばれるものだ。
　そのほかにも、パンにチーズ、ハムと言った軽食。
　アルコール度数のほとんどない発酵前のワインであるホイリゲは、この収穫祭ならではの貴重品だ。
　マァムの生まれ故郷であるロモスでも、王都では収穫祭が行われるが、パプニカの収穫祭は、よりブドウとワインの恵みに特化しているように思えた。
　そう言えば、ヒュンケルは、この街の収穫祭に興味があると言っていたなと、マァムは、出発前に聞いた彼のことばを思い返した。
　ヒュンケルは、露店に目を配っているが、それは、異常を感知するためのようにも見え、また、何かを探しているようにも思われた。
　マァムはヒュンケルに声を掛けた。
「何か気になるところがある？」
「・・・いや・・・。」
　ヒュンケルは曖昧に言葉を濁した。
　だが、ふと、彼は、何かを見つけると、マァムに尋ねた。
「寄ってみたい店があるんだが、いいか？」
　マァムは笑顔で答えた。

「もちろん。
　ちょっとくらいお店も寄らないと、お客さんっぽく見えないものね。」
「それもそうだな。」
　おそらくは、ヒュンケルの心理的な負担を軽くしようと思っての発言であろうが、マァムの助け舟にヒュンケルは笑みを浮かべた。

「いらっしゃいませ。
　どうぞ、見ていってくださいな。」
　ヒュンケルが立ち寄りたいと言った露天は、意外なことに花屋だった。
　地べたに座った若い女性の店主が、いくつもの桶を並べており、その中には、小さな花束がいくつも活けられていた。
　その花束は、素朴な秋の野の花を束ねたものであり、華やかさよりもつつましやかさが案じられた。
　店主の女性は、２０代半ばくらいであろうか。ヒュンケルと同じくらいか、それよりも少し年下に見えた。栗色の豊かな髪を後ろで一つに束ねており、見上げるはしばみ色の瞳が印象的な素朴な女性だった。
　若い店主は、ヒュンケルとマァムの姿を認めると、ふたりに声を掛けた。
「旅のお方ですか？」
「はい。」
　迷いもなくヒュンケルが答えた。
「この祭りの風習はご存じですか？」
「ええ。」
「初めてではないのですね。」
「はい。」
　店主の女性の問いかけに、ヒュンケルは即座に答えてゆく。マァムにはわからない会話に、彼女は戸惑った。
　店主の女性は、ヒュンケルに尋ねた。
「奥様でいらっしゃいますか。」
「そうです。」

「では、おひとついかがですか。」
「はい、１ついただきます。」
　そうしてヒュンケルは、店主に金を渡すと、桶の中の花束を１つ手に取った。
　きょろきょろと、店主の女性とヒュンケルを交互に見るマァムに気付き、店主の女性は言葉を添えた。
「この街では、収穫祭に、男女が想いを伝え合う催しがあるんですよ。この花束はそのためのものです。夜のステージで、花束を相手に贈って、想いを伝えるんです。そして、それを受けるときには、その花束から１本花を抜いて、相手に返すんですよ。」
　初めて聞く習慣に、マァムは関心を持って聞き入った。
　そして、途端に頬を赤らめると、マァムはヒュンケルに尋ねた。
「えっ・・・じゃあ・・・これって、わ、私に？」
「もちろんだ。」
　ヒュンケルも頬を染めて答えた。
　そんな二人の様子に店主の女性も顔をほころばせた。
「夜のお祭りにも参加されるのですか？」
　ステージ上で愛を打ち明けるという企画のことだ。
「い、いや、さすがにそれは・・・。」
　どもりながら答えるヒュンケルのとなりで、マァムも顔を赤らめている。これでも、ふたりは子までなした夫婦なのだが、あまりにも初々しい。そんなふたりの様子に、女性の店主は笑みを漏らした。
「以前はいついらっしゃったんですか？」
「もう・・・２０年近く前のことです。」
「そんなに前なのですね。」
　店主の感慨に、ヒュンケルは頷いた。
「まだ子どもの頃のことでした。
以前も、同じように花束を売っていた店主の方とお話をしました。
　貴方とよく似た・・・栗色の髪とはしばみ色の目をした女性でした。」
　すると、店主の若い女性は、嬉しそうに声を上げた。
「ああ、では、母かもしれませんね。この地方では、私のような髪

や目の色は珍しいのですよ。」
「そうですか。」
　そう答えながら、ヒュンケルは、嫌な予感に襲われていた。いま、この店の番をしているのは、この女性一人。かつて、幼いころにヒュンケルが出会った花売りの店主の女性は、いまは４０～５０代くらいのはずだ。
　ヒュンケルは、慎重に尋ねた。
「失礼ですが・・・御母堂は・・・。」
「亡くなりました。」
　その言葉に、ヒュンケルは、冷水を浴びせかけられたような思いがした。血の気が引く。
　ここはパプニカだ。
　ヒュンケル自身が侵攻し、戦場となった地なのだ。
　彼の軍が殺めた中にあの女性がいたのかもしれない、その事実が、彼の身を凍り付かせた。
　若い店主の女性は、そのまま言葉を続けた。
「少し前に病で。
　せっかく２度もの大戦を生き抜いたのですが、病には勝てませんでした。」
「そうですか・・・ご冥福をお祈りいたします。」
「ありがとうございます。」
　ヒュンケルは、悼む思いを現し、瞳を伏せた。だが、そこに、誰にも言えない感情が混ざっていることを、彼自身は痛感していた。

　花売りの露店を辞し、ヒュンケルは、マァムとともに、少し喧騒を外れ、街の端まで歩いていった。
　ヒュンケルは、右手に花束を持ち、左手でマァムの手を握っていたが、ふたりとも無言だった。
　そして、少し人混みから離れたところまで来ると、ヒュンケルは足を止めた。
　彼が視線を上に向けると、まだ空は明るかったが、すでに陽は傾きかけていた。抜けるような青空が、皮肉に思えた。
　ヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。

「卑怯だな、俺は。」
　マァムは、何も言わず、ただ握ったままのヒュンケルの手を強く握り返した。
「この街は、まだ俺が先生のもとにいた頃に、先生と一緒に来たことがあった。俺たちがネイル村を訪れてから１，２か月後くらいだっただろうか・・・。そのときにも、同じように、この街で収穫祭が行われていたんだ。」
　ヒュンケルは、幼かった頃、アバンとともにネイル村を訪れたことがあったということは、マァムは、彼自身からも、レイラからも聞いていた。マァムの記憶には残っていない幼い日の出来事だったが、その頃のことを指しているのだということは、すぐに分かった。
　マァムは黙って彼のことばに耳を傾けていた。
　ヒュンケルは続ける。
「あの日にも、今日と同じように、花束を売っている女性がいた。その女性に、この街の祭りの風習を聞いたんだ。先ほどの女性とよく似ていた。本当に、親子だったのかもしれんな。いまとなっては確かめようもないが・・・。」
　ヒュンケルは、いったん言葉を濁した。そして、遠い日を思い出すように少しずつ、思い出を言葉にしていった。
「そのときに、店主の女性と話したことは、いまでも覚えている。
　大切に思う子がいるのであれば、その気持ちを大切にしてほしい、と。」
　マァムは、自然と胸に上った感慨を口にした。
「・・・素敵な人だったのね。」
　ヒュンケルも頷いた。
「そうだな。子どもの俺に、真摯に向き合ってくれた。
　それから長いこと、この街に来る機会がなかったし、俺の立場ではパプニカにもなかなか行きづらかった。
　また来ると言ったのだがな。」
　押し殺した声の奥に、彼の悲しみと、そして、言いようのない苦しさが滲んでいた。
「亡くなったと聞いて、俺が殺したのかと思った。俺の・・・軍

が。
　解っていたはずだ、戦うということは、そう言うことなのだと。
　病で亡くなったのだと聞いて、ほっとしてしまった・・・。亡くなったことに、何も変わりはないというのにな。
　卑怯だな、俺は。」
　マァムは握っていた彼の手を放すと、黙って、彼の背中を抱きしめた。
　ことばは何の力も持っていなかった。ただ、マァムは、彼の苦しみごと、悲しみごと、彼の広い背中を抱きしめていた。
　ヒュンケルは、背中から腰に回されたマァムの手にそっと己の手を添えた。
　掌に感じられる彼女の温もりに、ヒュンケルはこれまで越えてきた道を思い返した。
　いつだって、この手に救われてきた。
　だからこそ、彼女に返したいものがあった。
　ヒュンケルはしばしの間、彼女に身を預けていた。
　だが、ぎゅっとひときわ強く彼女の手を握ると、マァムに向き合った。
　ヒュンケルは、買ったばかりの素朴な花束を彼女の前に示すと、マァムに問いかけた。
「お前に、これを。
　受け取ってくれるか？」
　マァムは嬉しそうに微笑むと、力強くうなずいた。そっと、ヒュンケルに手を添えて、花束を受け取る。
「ありがとう。可愛らしい花束ね。」
　マァムの見つめる先で、玉のような花が揺れていた。薄桃色の花の中に、アクセントのように紫の花が顔をのぞかせる。
「初めてこの街の習わしを知ったときから、お前に贈りたいと思っていた。
　お前はいつだって俺を救ってくれていた。
　何度もお前に助けられてきた俺がお前に贈れるものは、ただ、愛だけなんだ。
　お前を、愛している。」

マァムは、ヒュンケルの言葉を聞きながら、花束の中から、小さな桃色の花を取り出すと、ヒュンケルに１本差し出した。
　丸い玉のような花をつける、それは千日紅の花だった。
　マァムはヒュンケルに尋ねた。
「愛を受けるときは、１本返すのよね。」
「そう言っていたな。」
　マァムは、外套で隠れたヒュンケルの胸ポケットに、桃色の千日紅の花を１本、挿した。
　その千日紅の花が現わす言葉は「色褪せぬ愛」だった。

　夜になると、祭りの賑わいは最高潮に達した。
　ステージには、何人もの男女が上がり、花束を手に、互いに思いを打ち明けあう。その度に、観客たちからは歓声が上がっていた。
　やがて、司会の男性が、次なる告白者を紹介した。
「お次はこの方！レーナお嬢様！！」
　群衆に紛れてステージを見守っていたヒュンケルとマァムは顔を見合わせた。金の髪をたなびかせてステージに立っていたのは、紛れもなくレオナだった。
　レオナは、外套も外し、素顔を曝したまま、右手に持った花束を高く掲げると、澄み渡る声で高らかに宣言した。
「ダイくんっ！！愛してるわ！あたしが好きなのは、君だけよっ！！縁談なんて知ったこっちゃないわっ！！」
　ステージの最前列でレオナを見守っていたダイは、すくみ上った。反射的に、ステージに飛び乗り、レオナを止めようとして、叫んでしまった。
「レ、レオナッ！」
「ダイくん、はい。ちゃんと受け取ってよ。」
　焦るダイとは対照的に、レオナは悠然とダイに花束を渡した。
　群衆からざわめきが起きた。
「えっ・・・ダイって、勇者ダイ？」
「いまはパプニカ騎士団長の？」
「じゃ、じゃあ、あの女性って・・・。」
「女王陛下だー！！！！」

唸るような歓声が、群衆から上がった。レオナは歓喜のシャワーをひるむことなく浴びている。
　ヒュンケルはため息を吐いた。
「・・・まったく、あの方は。」
「これが目的だったのね。」
「最近、側近が縁談でうるさいとぼやいていたんだったな。」
「そうそう。」
　マァムも苦笑した。
「しかたない、脱出させるか。」
「そうね。」
　ヒュンケルとマァムは、フード付きの外套を目深にかぶると、ステージまで走った。そして、レオナとダイの背後にさっと降り立った。
　ヒュンケルはレオナをいさめた。
「女王、お遊びが過ぎますぞ。」
「あら、貴方たち最強の護衛がいるんだからなんてことないでしょう？」
「ダイ、抜けるぞ。」
「うん。」
　ダイはレオナを横向きに抱き上げると、花束とレオナを胸に抱え、ステージを走り抜けた。ヒュンケルとマァムも後に続く。
　あとには、夢を見たかのような呆然とした観客たちが残されていた。

　この年以降、この街では、収穫祭で愛の告白をすると、女王レオナの加護があるとの伝説が語り継がれるようになるが、それはまだ先の歴史である。